

人権教育は家庭から 子どもは見えています

人は、成長するにつれて、人とのふれあい、学びや体験などを通して人格が形成され、その基盤となるのが家庭であると言われています。

今回は、このことについて考えるヒントとして、グリム童話の「木のお皿」というお話のあらすじを紹介します。

(このお話の登場人物は、一緒に暮らすおじいさんと息子夫婦、孫の男の子です。)

おじいさんが年を取って、食べ物をごぼして汚すようになりまし。そこで夫婦はテーブルではなく、ものかげで食べさせることにしました。おじいさんは涙を溜めましたが何も言いませんでした。

おじいさんはますます年を取り、手が震え、陶器の皿を落として割ってしまいました。そこで、夫婦は陶器ではなく粗末な木の皿をあてがいました。

ある日、男の子が木を削っているのを夫婦が見つけました。何をしているのかと問うと、「ぼくが大きくなる頃、パパとママも年を取るだろう。だから、この木のお皿で食べさせてあげるの。」

と、男の子は言いました。夫婦はあわてておじいさんに、陶器のお皿をあてがい、テーブルと一緒に食事するようにしました。

お話の中の夫婦がおじいさんに対してとった行動は、おじいさんの気持ちを考えず、自分たちの都合のいいように扱っており、高齢者虐待の顕著な例です。

もちろん高齢者への虐待が許されないのは言うまでもないことですが、このお話からは、その他にも、さらに二つのことが読み取れます。

一つめは、子どもの目に映る大人の言動がいかに大切かということ。子どもは、日常の何気ない大人の言動を見て、意識せずとも人間関係のあり方を自然に学んでいます。さらに、学んだことを自身の生活に反映させています。子どもが人間関係のあり方を最初に学ぶのは家族であり家庭です。まずは大人が「人を敬い、人権を大切にすること」を見せることが、子どもの人権感覚を育てる第一歩になることではないでしょうか。

二つめは、夫婦の後半の行動です。夫婦は子どもの言動を見て、自分たちがおじいさんにした仕打ちの愚かさに気付かされました。その後すぐに自分たちのした間違いを正しました。まさに「負うた子に教えられ」ですね。しかし、この間違いを改めるという姿勢も、おじいさんには見えて学んでいくはず。です。

このお話から感じることは人それぞれあるでしょうが、自分の日頃の言動を振り返ってみるよい機会になればと思います。

(参考：グリム童話「木のお皿」)

ご案内

【第2回人権教育学級】

【日時】10月19日(水)午後2時

【場所】サウンドハウスホール

【講師】マーク・フェネリーさん

イギリス生まれで、バーミンガム大学大学院(修士課程)を修了し、現在は四国大学国際文化学科学科教授。1990(平成2)年に来日し、13年間の那賀町滞在中に木頭杉一本乗り名人になる。専門は小学校英語教育で、小学校英語教育のあり方、教員養成、小中連携、指導者のニーズ等について調査研究を行っている。

【演題】外国人と人権

イギリス人から見た「日本」

市教育委員会生涯学習課
人権教育推進室(新教育庁舎2階)
TEL 32・3814
FAX 33・1230
Mail:jinkenkyouiku@city.komatsushima.tokushima.jp

市民文芸 花みずき歌壇 (394) 松並敦子・選

キヌサヤとキャベツを持ちくる友のいて 齢を聞けば九十三歳
田浦町 太田カツミ

あなたから絵葉書着けばその町が真ん中になるわが世界地図
金磯町 川下 年男

飽きもせずくり返し開く携帯の初の曾孫の三ヶ月の笑い
立江町 湯浅かや子

何処より雀の声の賑やかに時化の去りぬる 茜の空見る
松島町 萬野 行子

古き本を本棚から抜き読み返す 齢重ねれば異なる感動
間新田町 瀧川 益美

コロナ禍で逢えない君は無事なのか 負けるな 負けるな 病院
中田町 多田 健児

暮らして
道端の蝸牛の殻を拾い持ち主は何処とふと問いかけり
田浦町 西 教明

初夏の陽にサンドの種がよく生えて 緑の音符ざらりと並べり
赤石町 田原トシ子

ウクライナの民に涙す空襲に喘ぎし 我の少女期を重ね
江田町 深田 伴子

三つ編みに落葉のかんざし挿す 園児み空を仰ぐ 頬のぶつくり
横須町 山崎 泰子